

■学位論文要旨（修士）

中山間地域の存続と 集落の自律性

—兵庫県若杉高原

—おおよやスキー場を事例に—

河 合 麗 子*

本稿では、今日の山村など中山間地域の抱える諸問題を、ある集落の事例に基づいて、これまでの歴史を跡付け、現状分析することを目的としている。

本論では中山間地域と位置づけられ、かつて林業を基幹産業としその恩恵を受けながら集落住民が丸となり自律的に集落を運営してきた、兵庫県養父市大屋町にある若杉集落を1つの事例として取り上げている。若杉集落は、高度成長以前は林業を主業としていたが、その後の産業構造の変化により林業が衰退し始めると、その影響から過疎化や高齢化が急速に進行し、林業を支える人々は勿論のこと、集落を運営することまでもが困難になりつつあるのが現状である。若杉集落は、1960（昭和35）年代以降、補助金（林業構造改善事業）に依存せざるを得ぬ非自律集落となってしまった。しかしながら、住民たちは今なお地元へ愛着を持ち、スキー場を開発させ集落維持と運営を行っている。このような集落の現状を記録し、より多くの人に中山間地域の抱える問題と現状を知ってもらいたい。本論はこのような問題意識から出発した。

まずI章では、若杉集落の概要について論述している。ここでは、若杉集落を取り囲む環境とその社会構成について叙述した。若杉地区は、基幹産業を林業としていた。その地理的環境は山林に囲まれた、南北に長く偏狭な土地に家屋が集在し、狭小な耕作地がわずかにある全37戸の集落である。若杉集落の特徴は、その集落の運営方法にある。それは偏狭な耕作地ゆえに、地主小作関係が存在しな

* 京都女子大学大学院 現代社会研究科
公共圏創成専攻

いことから、集落内の社会関係が非常にフラットということである。区長選出においては個人の資質が重視され、集落内の規則等、集落運営に関することは集落住民で決定するという、比較的民主的な集落であったといえる。またかつて林業が盛んだったが、共有林の占める割合が多く所有権が集落にあったことも、若杉集落運営における大きな特徴であったといえるだろう。

続いてⅡ章では、若杉集落の位置づけを行った。上述のように、狭小な耕地面積と不便な公共交通から、若杉集落は地理的環境に恵まれた地域とはいえないと推測される。それゆえに高度成長以降は、高齢化と過疎化が急速進行し、現在では人口の半数以上が70歳を超える高齢者という状況に陥っている。そこで、農林水産省の報告に基づく中山間地域の定義を用い、若杉集落を農林統計上の中山間地域として検討した。

そしてⅢ章では、Ⅱ章に続き、統計やデータを用い、若杉集落のかつての基幹産業であった林業について、戦後の変遷を跡付けた。ここでは終戦から高度経済成長期までを第1期、そして高度経済成長期からバブル期までを第2期とし、最後にバブル崩壊から今日までを第3期として、それぞれの時期にみられる林業の特徴を論述している。

Ⅳ章では、若杉集落の歴史を、『若杉沿革誌』に基づく跡付けを行った。Ⅲ章同様、若杉沿革誌に記載がある明治時代から今日までを、第1期1873（明治5）年から1925（大正末期）年まで、続いて第2期を1926（昭和元

年）年から1937（昭和12）年まで、そして第3期を1938（昭和25）年から1960（昭和35）年末期まで、第4期を1970（昭和45）年から1989（平成元）年、最後に第5期を1990（平成2）年から2006（平成18）年までと5期に区分し、それぞれの時期に特徴的な出来事、特に集落の運営という面に注目し、林業（育・植林、そして間・主伐による区費の財源の確保）、そして出資項目（林業によって得られた資金を基盤とする集落運営の方法）項目、更には各時期を代表する出来事に着目して、これまでの若杉集落がどのように運営されてきたのか、ということについての考察及び分析を行った。

またⅤ章では、林業を基幹産業として来た若杉集落が、林業最盛前と最盛期を経て衰退期に入った今日とでは集落の暮らしがどのように変化したのかを、『若杉集落の暮らしと文化』及び個別面接の聞き取り調査を用いながら、論述した。本章においては、林業以外にも、貴重な現金収入となる養蚕、そして偏狭な耕作地を有効に利用し食糧確保に努めていた農業についても論述している。その際、われわれの日常生活において一番身近にある、「食生活」の変化に着目した。さらに、今なお運営の困難となりつつある若杉集落に、何故住民は居住し続けるのか、何が若杉集落の住民を惹き付けるのかという、若杉の魅力についても論述している。

Ⅵ章では、林業構造改善事業に基づき建設された、若杉高原おおよスキー場について、Ⅲ章及びⅣ章にならひ、3期に分けて論述し

た。まず、スキー場について、地理や気候状況そして概況を述べた後、何故スキー場建設が可能になったのかという背景と行政の支援に基づく集落の活性化から本オープンまでを草創期とし（1971年から1983年）そして本オープンから総売り上げ2億円に達するまでを実践期とし（1984年から1993年）、最後に総売り上げ2億円達成後から今日まで（1995年から2007年）の状況をスキー場の沿革と共に、論述している。

そして最後に、Ⅶ章においてⅠ章からⅥ章まで論及し、気付いたことのまとめを記している。